

茶の湯文化学会報

No.94

第94号 / 2017年9月26日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

平成二十九年六月十日
(土)に同志社大学今出川校舎で「平成二十九年度総会・大会」が開催された。午前十時から研究発表として岡宏憲氏「岡田茂吉と近代茶道」、依田徹氏「幕末宮中の茶の湯」、岩間眞知子氏「日本における『茶経』の受容について」、小笠原博氏「江市龍翔山華藏寺の『お成りの間附茶室』と不昧公の棟札について」、以上の四件が発表された。午後のシンポジウムのテーマは「近世後期の大名茶の湯」とし、白幡洋三郎氏（国際日本文化研究センター名誉教授）、三宅秀和氏（群馬県立女子大学講師）、砂川佳子氏（和



シンポジウムの様子
左から白幡氏、三宅氏、砂川氏、山田氏、熊倉氏

平成二十九年年度大会の見学会
宮武慶之

歌山県立文書館嘱託研究員）、山田哲也氏（裏千家）を迎え、コーディネーターには熊倉功夫氏（茶の湯文化学会会長）の進行のもと活発な議論がなされた。前日に続き、翌十一日（日）には松殿山荘（宇治市）で見学会が行われた。今回の目的は前日の総会のテーマと同様に、近世後期の大名茶の湯が近代の茶道にどのような影響があったのかを建築物や茶風から知ることであった。そこで松殿山荘について少し触れておく。松殿山荘は高谷恒太郎（宗範／一八五一—一九三三）により設計された建物である。宗範はもともと弁護士であった。当初は大阪にあつて弁護士として活動したが、その後は東京に出て陪審員の判事になった。大阪にあつた屋敷は天王寺屋五兵衛の屋敷跡を買い取つたもので、現在の松殿山荘の部分を構成している。弁護士として活躍した時期、その手腕は被告原告を大阪の屋敷に呼び、即座に判断したことや、勝ち目のない裁判には関与しなかつたため、多くの実業家や企業からの信頼も篤く、顧問弁護士となり活動したようである。このように財政的にも豊かで、元来、美術品に興味のあつた宗範は

多くの道具も収集した。著名な作品を挙げておけば周文筆「真山水」、中興名物瀬戸茶入銘「大正木」、金海茶碗銘「西王母」、彫三島外花茶碗銘「八重垣」などがあり、美術品収集家としても一見識を有していたことが知られる。このような宗範であったが、その後山莊流という茶の湯の流派を立ち上げて活動することとなる。その大本山というべき場所が松殿山莊である。

さて山莊内部であるが宗範が書院の茶の湯を志向したため広間の席が多く見られる。当日は山莊内の茶席の解説を代表理事の平岡己津夫氏、同財団理事の桐浴邦夫氏の解説により詳細な説明があった。そこで本稿ではその内容について紹介する。(以下は当日各会場に置かれた案内及び『高谷宗範伝』(松殿山莊茶道会、一九三五年)を参考にした。)

大書院の床の間は三畳あり、そこには宗範筆の「花道箴」が掛けられた。この掛物は『高谷宗範伝』の巻頭を飾る掛物で、大正九年(一九二〇)の古稀(七十賀)に際して書かれたものである。まさに宗範の茶風のありのままを伝えている。大書院は二十畳もあり、庭に対して三方面に開放している。その丸い柱は天王寺屋五兵衛の屋敷の大黒柱を用いた



瑞鳳軒の霞棚の様子



大書院の様子 床には「花道箴」が掛かる



呈茶席の様子 床には狩野伊川院の三幅対が掛かる。

ものである。

中書院は十畳の主室と八畳の次の間から構成される。扁額には「瑞鳳軒」とある。これは大正十五年(一九二六)九月二十日にスウェーデン皇太子妃の来莊を記念して命名された。この当時は山莊の造営も途中であったがスウェーデンは瑞典とも書き、来臨を祝して命名されたものである。主室には修学院離宮の霞棚を模して造られた床脇がある。

呈茶席となったのは天五楼である。元は宗範の大阪の自邸であった天王寺屋の屋敷より移築したものである。西側を懸造りにし、採

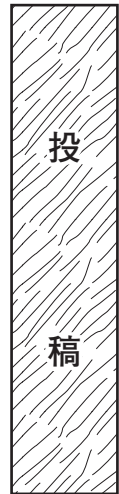
光を取り入れている。見学会の下見で中村利則理事、山田哲也理事らと同行して伺った際には、山荘流の方々が稽古をしておられた。

建物の各所には方と円の組み合わせた造形が随所にみられ、「水は方円の器に随う」の言葉を思い出さずにはいられなかった。この点に宗範の思いをみることができる。

なお見学会当日は百名近い参加者があり、盛会であった。見学と合わせて宗範の茶の湯の流れを守り続けている山荘流の皆様による呈茶席が設けられた。床の間の掛物には狩野伊川院による三幅対が掛けられた。中幅は富士に鶴が羽ばたく図で、左右幅は春秋の景色を描いた図である。当日使用された御茶は許波多の白（京はやしや詰）、菓子はお松による「青もみじ」であった。

以上により平成二十九年年度総会・大会および見学会を無事に終了した。

見学会に際してご配慮を賜りました平岡己津夫氏、呈茶をご担当いただきました山荘流の皆様、お手伝いいただきました茶の湯文化学会会員亀井晴美氏、小池好江氏に深謝申し上げます。



『山上宗二記』不審庵本
武田家之本とその伝来

山下桂恵子

本年（平成二十九年）六月、『茶の湯文化学会会報No.93』の岡本文音氏「山上宗二と岩屋寺、そして奥出雲」を興味深く読んだ。二度までも岩屋寺を探訪し、参道を這うように進まれたという。実は、わたくしも「岩屋寺」の実地見学を思い立ったが、郷土史家、高橋一郎氏に電話でお尋ねしたところ無住寺になっていることがわかり断念したのだった。ところで岡本氏は、秘伝書（山上宗二記、以下宗二記）を贈られたうちの一つが岩屋寺で、そこから推定されるのが「三沢宗程」である、と記される。しかし、そうではなく、伝書は「三沢宗程」宛に書かれたものであって、「岩屋寺」は気付きづけであることを説明してみたい。

三沢宗程に贈られた茶の湯伝書『山上宗二記』昭和五十九年（一九八四）三月、東京国立博物館において『特別展図録 茶の美術』が刊行され、そこに表千家不審庵蔵「山上宗二記」写真版が始めて公開された。東博の図録

解説に「…山上宗二自筆本と推定され、類書中最も高く評価されている茶書である…」と記される。

『宗二記』奥書に「宗程様」に伝書を贈る理由が詳記され、その一節に次のように見える。

…今日東路ヲ指テ罷下候、御披露奉憑候、（あま）仍如件、

同年（天正十六年）二月二十七日

嵐庵宗二（花押影）

雲州

岩屋寺参

「御披露奉憑候」は、岩屋寺に対して「宗程様」に伝書をよろしく頼みます（「宗程様」に届けて下さい）という披露状（依頼状）なので、『宗二記』そのものが「宗程様」に贈られた伝書といえる。

「宗程様」について参考のため『新修島根県史』を繙いたところ、三沢為清の寄進願文案に、

天正陸年 三沢下野入道

沙弥宗程（花押）

岩屋寺快慶法印

とあり、岩屋寺の大檀越であること、当時の岩屋寺住持は快慶法印であることがわかっ

た。更に『横田史』を見たところ三沢氏の系図に「為清（才童子丸・宗程）」とあって、この人物は三沢氏十二代の当主であることもわかった。

ところで宗二は、「この書物かきものは初心のためには重寶の第一だが、数寄者のためにはいらざるもの」と記している。快慶法印は「この道の奥の奥を御尋ね」る程の数寄者であるから、伝書の必要はないが「尊老が御所望であるならば御写しあるべく候」と、書写を許可したのである。岩屋寺（快慶法印）に贈った伝書ならば、「御写しあるべく候」と記すはずはない。ちなみに、同書には「宗程様」の文字が四ヶ所あり、すべてに鬺字台頭の礼がとられている。宗二は直接「宗程様」に伝書を贈ることを遠慮して岩屋寺住職を介したといえよう。

不審庵本『宗二記』の伝来

「岩屋寺」について、高橋一郎氏にお電話でお尋ねしたのがご縁となり、岩屋寺や三沢宗程に関する事柄をお手紙や電話でお教え頂いていた。そこで拙稿、「山上宗二記」を贈られた「宗程」（『年報月曜セミナール』第1号）をお送りしたところ文中に、宗程拝領の「山上宗二記」は「岩国藩吉川侯の茶匠の家に伝来、近年掘り出さ

れ、表千家に納められたものという」、との永島福太郎先生ご教示を記した箇所があったことから「伝来を追及して下さい」というお手紙と、資料二点（高橋一郎「富田城主 吉川元秋の妻の願い―三沢為虎の妹―」（横田史談会）・富田伊津美「武家茶道の系譜」（『歴史読本』増刊昭和五十三年九月）を頂いていた。そこでこの資料をもとに『宗二記』が「岩国藩吉川侯の茶匠の家に伝来」した経緯を次のように推測した。

まず、宗二が高野山に上った時期を考えてみた。宗二は、寺中の安養院・成就院に懇望されて廿年の稽古を三百日で成し遂げ、一卷（『宗二記』）を兩人に授けたと記している。その写本（斎田記念館本）の奥書「天正十六年（五島美術館図録「山上宗二記」）正月廿一日（天正十四年の暦「二二頁」） 宗二（花押）／安養院（天正十五年三月二十七日になる。おそくとも同年三月始めころまでには高野山に上ったと考える。

宗二は「今日、東路を指して罷り下り候：同年（天正十六年）二月二十七日」（不審庵本）、高野山を後にするが、岩屋寺（きづげ）気付伝書（『宗二記』）は安養院が預かり、「岩屋寺」（快慶法印）へは後日、幸便を以て届けられたこと

だろう。『宗二記』を受け取った快慶法印は書写を終えてから三沢家に届けたと思うが、宗程は天正十六年中に没しており（『横田町誌』、三〇頁）、伝書の日付は同年「二月廿七日」であるから宗程に直接、手渡せたか否かは不明としても、三沢家が受け取り保管していたことだろう。

ところで、三沢宗程の息女（一五六五―一六四五）は、毛利元秋（元就五男）に嫁いだが、元秋は天正十三年（一五八五）五月三日、三十四歳で病没した。このとき二十歳過ぎの若さだった息女は、後に宮島の厳島神社座主棚守某（上田宗箇の門弟）と再婚するのだが、棚守（注参照）が茶の湯に執心していることを知っていたので実家に保管されている『宗二記』を持参したと推測する。

息女没後のことと思うが、棚守の許に身を寄せていた山県玄巴（一六三五―一七〇七）は茶の湯の手伝いをしているうちに熟達したので棚守は、吉川広正（『寛政重修諸家譜』六一六）に茶道役として推挙するが、その際に『宗二記』を贖としたのではなかったらうか。

ちなみに当時、毛利家では茶湯も盛んで一族の「吉川広家（一五六―一六二五）」など、みづからたんねんにたくさんの数寄屋図を写したりしている（永島福太郎「茶道文化」論集「下巻」三八六頁）。

「吉川侯の茶匠の家に伝来」した「茶匠の家」は「山県家」が考えられよう。不審庵本『宗二記』の伝来を次のように推測してみた。

安養院預かり…岩屋寺(快慶法印書写) ↓

三沢宗程(三沢家) ↓宗程息女 ↓ 棚守(野坂)

↓山県玄巴(吉川侯茶匠) …山県家 ↓ 表千家。

注 「棚守は特定の神社におかれた神職の

一つ。巖島では佐伯氏が連綿として棚守

職に補任され、その地位は高かった…天

文十年(一五四一) 従来の棚守滅亡後、

野坂家は棚守を世襲、社家の筆頭となっ

たため神社宛の文書も多く伝わり「巖島

野坂文書」と呼ばれる。一六世紀の野坂

房顕—元行父子二代のものが中心」(国

史大辞典)。

宗程息女と結婚した棚守は野坂房顕、ある

いは元行が該当するだろう。

「武田家乙本」について

「武田家乙本」「山上宗二記」(以下、乙本)

は、『宗二記』書写を許された岩屋寺住持快

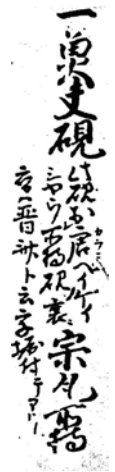
慶法印自筆原本の翻刻と考える。根拠はいく

つかあるが三点を挙げると、第一は、「不審

庵本と文字の大小から改行まで忠実に書写さ

れていること」、第二は、「漁夫硯」の所持を

「宗凡」と記されていることである。



茶会記から「漁夫硯」使用者を調べると、

永祿九年(一五六六) 五月から同十二年まで

武野宗瓦使用が見えるが(今井宗久茶湯日記、宗

凡」(津田宗凡カ) 使用はないので「宗瓦」

が正しい。しかし、宗二の書き癖から一見「宗

凡」とも読める。法印の誤写は致し方なかつ

たと思う。

第三は、奥書「未孰之存分書加候也」は、

「未我之存分書加候也」と誤写されている。「未

孰」は、「未熟」の「熟」の脚部ハカの略

(永島福太郎先生ご教示)で、しかも草書体

で記されているため「我」と誤読されたのだ

ろう。これも不審庵本書写であることの証と

いえよう。ちなみに、酒井家本・尊経閣本は「俄

ニ加愚案ヲ以書記」・「俄ニ加愚案書改之條」

とあり、趣旨は不審庵本「未熟之存分…」と

同じである。以上のことから「武田家乙本」は、

岩屋寺住持快慶法印の『宗二記』書写の自筆

原本の翻刻と考える。しかし、法印から武田

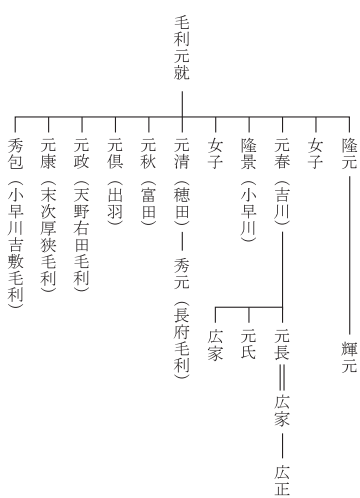
家に至る経路はわたくしにはわからない。

岩屋寺の寺宝

岡本氏は荒廃した岩屋寺から数々の寺宝や

貴重な史料が流出したことを記し、しかし平成二十四年、京都国立博物館「大出雲展」において、「期せずして本尊十二面観音に巡り合い、感動のあまり身震いを覚えた」と記されていることに、私も感動した。更に「本尊と共に安置されていた四天王像は、愛知県の浄蓮寺にあり、愛知県文化財指定を受けていること、また山門に安置されていた金剛力士像は現在、オランダのアムステルダム国立美術館のアジア館の目玉として展示されている」とのことである。岩屋寺から流出した寺宝が数点なりとも安住の地を見つけられたことはせめてもの救いであった。

〈参考〉毛利家略系図(承原正義「中国をめぐる戦国武将たち」大内、序子二毛利、二四一—二九〇頁)



第四回「お茶三昧」カンファレンス

マツキオンみどり

真つ青な空に雲ひとつないカリフォルニア日和に恵まれた四月三十日、第四回「お茶三昧」二〇一七茶の湯と茶文化に関するサンフランシスコ国際会議」をサンフランシスコ州立大学で開催した。

このカンファレンスは茶の湯文化研究の国際発信に寄与し、研究成果を広く一般公開することで海外における茶の湯文化研究の理解と日本文化の認識を深めることを目的として平成二十四年に設立された。発起人は矢野環氏（同志社大学教授）、宮武慶之氏（当時同志社大学大学院生）、マツキオンみどり（サンフランシスコ州立大学教授）。特別顧問は熊倉功夫氏（茶の湯文化学会会長）。

「茶の湯と禅」というテーマを掲げた今回は、特別講師として小堀月浦師（大徳寺龍光院住職）、芳澤勝弘博士（花園大学国際禅学研究所元教授・現在顧問）、熊倉功夫博士の三名をお招きし、茶の湯の精神性を探究した。一七〇名以上の来場者があり、盛会であった。会議の前日四月二十九日には、北加日米会の茶室「観桑庵」（中村昌生先生設計）にて、日米会ティーンサエティー会員の表千家有

志十一名による日米会協賛歓迎茶会が開かれた。特別講師の方々、龍光院欠伸会の皆様、米国の研究発表者がお客として参会され、小間での濃茶席と広間での国際色豊かな薄茶席を楽しまれた。茶会は毛利栄子（宗栄）、関野ツル子（宗鶴）氏らに担当していただいた。



歓迎茶会后に主客全員で

翌日のカンファレンスは、朝八時半からの坐禅から始まり、午後五時半まで学術研究発表がびっしりという非常に厳しいスケジュールであったが、聴衆は早くから参集された。皆様は坐禅で心を清められた後、小堀師の禅

院の生活についてのお話、芳澤先生による茶掛けの画賛についてのレクチャー、そして午後には、茶の湯の精神史を綴る熊倉先生の基調講演とアメリカの研究者三名による研究発表（千宗旦の禅、唐代の僧の茶詩にみる精神性、茶の湯の点前自体に宿る禅性）に熱心に耳を傾けられた。そして昼休みには龍光院欠伸会のメンバー二十二名様による立礼点前と呈茶があり、京都の料亭特製のお菓子「西湖」と龍光院の茶壺の抹茶「大通庵」が参加者全員に振舞われた。欠伸会は主茶碗（銘「向東」、茶器（龍光院書院の古材を以って）、茶杓（銘「葦葉」、竹花入（銘「扶桑」）を京都から持参され、デモンストラーションに使用後、お茶三昧会議に恵贈された。全て月浦和尚の命名による。

会議開催にあたって茶の湯文化学会様にご後援と広報のご協力を賜り、誠に名譽なことで感謝申し上げます。そして、お世話になった特別講師の先生方、欠伸会、並びにご支援いただいた多くの企業、組織、個人に対し、関係者一同に代わり心から御礼を申し上げます。来年の会議のテーマは「茶の湯の食文化」の予定。

例 会

東京例会

(平成二十九年一月二十一日)

「松平不昧造営の大崎苑の復元—絵画史料

から復元した松平不昧公大崎苑の特徴と

江戸の都市景観について—

関口 敦仁

松平不昧が品川御殿山に造営した大崎苑について、復元に利用した絵画史料から得た知見や復元によって得られた景観や庭園のあり方について発表を行った。第七代出雲松江藩主松平治郷(不昧、一七五一年—一八一八年)は、寛政十年(一七九八年)品川戸越村に下屋敷を賜り、享和二年(一八〇二年)にはお抱地の大崎下屋敷敷地内に独楽庵をはじめとして十一棟の茶室を作り始める。1・谷文晁「雲州不昧公大崎別業真景」文政三年(一八二〇)、2・大崎御屋敷分間絵図面(松江歴史館蔵)、3・大崎圓図巻(写一八七七松平不昧会庭園茶室図 松江歴史館蔵)、4・大崎名園一覧雑記に付録として雲州不昧公御教寄庭園写図(鳥根県立図書館蔵)を基に、

地形図を起こし地図を配置し、建物などを3DCGで作成して、大崎苑の全容を復元した。地形との整合性は、指図に描かれた階段の段数を参照することで実現することになった。これらの変化から、道の位置や階段と高低差の関係を元の状態に近づけることになったと思われる。

この復元によってこの十五mから二十mの標高差のある特徴的な地形に茶室が配置され、露地として接続された庭園は大変特徴的で、これまで茶室の工夫ばかりの評価から、庭園としての価値評価すべき内容を持つものとして判断ができればよい。目黒川河川景観と江戸の風景として、大崎苑の高台からは西方へ目黒川河川敷、両台地、丹沢山脈、富士山が大きな広がりの中で観ることができ、江戸の郊外を代表する景観を有していたと考えられる。この景観は、浮世絵の江戸百景や江戸名所絵図の、行人坂、雉の宮、目黒茶屋、品川御殿山、目黒元富士、目黒新富士などの背景の風景などから判断可能である。また、目黒新富士が描かれた、東京大学資料編纂室蔵の「鎌が崎富士山眺望の図」五点に含まれる、目黒河川敷の水耕農地利用と富士の眺望などから、当時の水田利用の景観を読み取ること

ができる。

絵画史料と地形データから見られるように、大崎苑の庭園空間が標高差を利用した庭園であることが判明し、庭園としての価値の評価は必要であろう。庭園内は石州流の茶庭の流れをくみ、飛石と延段が多用された手法を用い、広い空間の中で明るく軽妙な空間性を持つていた。復元された景観から、松平不昧造営の大崎苑は江戸の大名庭園としては、地形を積極的に利用した、大胆な庭園設計であったと考えられる。復元に対して、屋根の処理や使用する瓦の種類の違いについて質問があり大変参考になった。

(平成二十九年七月二十二日)

「茶の湯展開催の意義と今後の課題」

三笠 景子

東京国立博物館において、平成二十九年四月十一日から六月四日までの計四十九日かけて開催された特別展「茶の湯」は、約二十四万六千名にのぼる総入場者数となった。さらに図録の売り上げは七人に一冊という高い割合であった。

興行としての展覧会は、数字をみれば成功といえるものであったが、主催の立場で本展

覧会に携わった一人として、当初より感じていた問題がいくつかあった。

その最たる点とは、日本文化を象徴する一つとしての「茶の湯」の重要性、その意義をいまどのように人々へ伝えるかということであった。美術館・博物館に求められる存在意義や展示形態が時流とともに大きく変化するなかで、第一級の出品作品の品格を保ちながら、わかりやすい展示動線を作り出し、また魅力的なイベントを開催し、「茶の湯」を通じて日本文化の粋を伝えることに関係者一同、碎身した。

開催と同時に多くのご意見が寄せられたなか、「わかりやすい」という感想は個人的に大きな励みとなった。また若手を中心に館外の研究者に、各々の視点に立って「茶の湯」をどう見るか、諸々の場面で語っていただけたいことは本展において意義深いものであった。展覧会に携わったすべての関係者、及びご来館いただいた皆様に感謝申し上げるとともに、博物館の末席を汚す一研究員として本展の課題を消化し、次世代へ繋げていけるよう努めたい。

(平成二十九年七月二十二日)

「美濃窯における

織部茶入の位置付けについて」

内田昌太郎

今日一般に桃山陶と呼ばれる茶陶は、現在の岐阜県南東部に位置する美濃窯で生産された焼物であることは広く理解されている。このうち特に織部焼は型を用いた成形法や、歪み、筥による線刻や独特の意匠の文様装飾が特徴的で、生産器種は多岐に渡る。その中に「織部茶入」と呼ばれる一群が存在する。

通常、茶入は生産された窯業地を冠して「瀬戸茶入」などと呼称されるが、「織部茶入」の場合には「織部焼」という個人名もしくは特定の形式を指す名称である。従って後者の場合には「黄瀬戸茶入」や「瀬戸黒茶入」の存在を理論上想定できるが、実際には存在しない。桃山時代、美濃窯の茶入生産は織部焼までは従来の形式の茶入（褐色の鉄釉茶入）を生産しており、織部焼になって桃山陶の茶入を作り始めたかと換言できる。ここで織部茶入を作り始めるという変化に茶入生産の画期が想定できる。また織部茶入以前と以後の茶入を「唐物写」という視点で比較したとき、大きな変化を認めることができる。これは織

部茶入を経験することにより、唐物を写す態度や茶入自体に対する価値観が変化したことを示していると考えられるからである。本発表では、伝世織部茶入と生産地出土の織部茶入の特徴をまとめ、比較検討することにより、美濃窯においていかなる過程で織部茶入の生産が始まったのか、またその展開及び位置づけを考察する。最後に「織部茶入」の名称と概念の成立についても多少言及する。

北陸例会

(平成二十九年四月十五日)

「京都東山西行庵、

宮田小文法師新出史料について」

岩原 正吉

桜花をこよなく愛し、諸国を旅し、多くの足跡を残した平安末期の僧侶にして歌人西行法師が晩年のすみかとした京都東山の西行庵は、明治二十六年京都の四崎人の一人として知られた宮田安次郎（後に得度して、行圓宮田小文法師、生まれは越前国今立郡横越村（現福井県鯖江市横越町）によって再建され、今日に至っている。西行庵再建のいきさつは、小文法師を知る友人・知人により、師の生前死後に渡り、その飄々として無欲恬淡の

生き様とともに親しみを込めて書き残されている。中でも小文法師の良き理解者であった小西大東は、小文法師の生前を偲び、その生涯を詳しく書き残しており、その追悼文「畸人小文」中で、小文法師自らが西行庵再建に關する覚書を書き残していると記している。

しかし、小文法師自らの覚書はこれまで見つかっていなかった。その覚書が、鯖江市横越靈園における宮田小文法師忌、平成二十八年十月十三日（小文法師の命日）に、京都西行庵花輪嘉泰氏によりもたらされた。この覚書の出現により従来知られていなかった西行庵再建までの詳しい手続きと当時の京都市に提出された各種書類・図面が明らかになった。先ず、名勝「円山公園」内の西行庵跡地が極めて短い日数で西行庵再建を条件に安次郎に賃貸されたこと、その許可条件に許可後三ヶ月以内に西行庵を再建しなければ、賃貸契約が無効になるとあったことが明らかになった。次に、借地申請書と併せて再建する西行庵の平面図が提出されていたこと、既に知られているが、途中で大徳寺塔頭眞珠庵下にあった浄妙庵を譲り受け、移築・母屋とする変更願を出し、これも小北山村にあった皆如庵を譲り受け、移築し、母屋と一体の再建が

行われたことが明らかとなった。これらの事から当時の西行庵再建計画は京都市の意向に添ったものであったことが強く示唆されるとともに、出願当初の平面図により、茶室を有する庵室に対する当時の考え方を今後探る糸口が得られた。



東京例会

九月三十日（土）午後二時

（会場：五島美術館）

「粉引・無地刷毛目と粉粧粉青沙器」

吉良 文男

「日本に伝世する

粉引・無地刷毛目について」

砂澤 祐子

十月二十八日（土）午後二時

（会場：五島美術館）

「七宝の茶道具について」

福島 修

「川上不白『利休居士石浮図銘』について」

石塚 修

平成三十年二月二十四日（土）午後二時

（会場：根津美術館）

「紀州徳川家の菓子木型について」

鈴木 愛乃

「日本における『茶経』の受容」

岩間真知子

静岡例会

十月十四日（土）

（会場：静岡産業大学情報学部藤枝駅前

キャンパス（愛称V I V I ビビ）一階）

「おもてなしの茶

テーブルコーディネートなどを交えて

お茶の楽しみ方と、おもてなしの内容を

考える」

会費 千円（お茶・お菓子・資料）

共催 静岡産業大学地域学研究セン

ター・世界緑茶協会

平成三十年一月四日（木）

（会場：静岡産業大学情報学部藤枝駅前

キャンパス（愛称V I V I ビビ）一階）

「寿ぎの茶

正月に因み、目出度い場面で使われる

茶について」

中村羊一郎

会費 千円（お茶・お菓子・資料）
共催 静岡産業大学地域学研究会
ター・世界緑茶協会

東海例会

九月三十日（土）午後二時

（会場：名古屋文化短期大学）

「土と長石の先祖は花崗岩―

志野・織部・黄瀬戸を科学する」

高木 典利

十一月二十五日（土）午後二時

（会場：名古屋文化短期大学）

「新宗教と茶の湯

―世界救世教・岡田茂吉の事例―」

岡 宏憲

近畿例会

十二月九日（土）午後二時

（会場：同志社大学）

「『コミュニケーション学』を通して見た

茶道における『第二の見立て』」

伊住政和氏の言葉『無言のコミュニ

ケーション』を出発点として」

高橋 尚美

「吉村観阿についての研究発表（仮）」

宮武 慶之

北陸例会

平成三十年三月十七日（土）午後二時

〔未定〕

金沢例会

平成三十年三月二十四日（土）午後一時半

（会場：近江町交流センター）

「岡倉天心『茶の本』について」

田中 秀隆

高知例会

十二月三日（日）午前十時～正午

（会場：湯川温泉）

茶の湯関係文献を読み所感の発表〔未定〕

茶事 正午～十六時

席主 四名

会費 五千円

平成三十年二月四日（日）午前十時

（会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室）

高知支部三十年度事業計画〔未定〕

茶席 茶の湯文化学会の研究成果を実践

する茶の湯を一般の方々親しく
でもらうため「床飾り」「道具立て」
はするが、お点前はお客次第とし
て楽しめる茶席を設ける。

開催予定日

高知新聞「こみゅっと」に掲示

会費 三百円

※参加希望者は予め連絡をして下さい



新刊案内

*『利休の生涯と伊達政宗―茶の湯は文化の
下剋上―』生方貴重著 河原書店(定価二、
五〇〇円＋税)

戦国武将たちの心のネットワークの中心に
いた利休は、なぜ切腹しなければならな
かったのか。長らく政宗にかけられていた
誤解とは―。